

目次

第一章 サキユバス限定オークションで公開処女喪失.....2

第二章 母乳プレイと貝合わせ.....エラー！ブックマークが定義されていません。

第三章 分身魔法で乱交快樂墮ち.....エラー！ブックマークが定義されていません。

第一章 サキュバス限定オークションで公開処女喪失

「さあさあ淫魔の皆様、どうぞご覧ください。本日の目玉商品でございます」

蜘蛛の下半身を持った女性型の魔物——アラクネが、恭しく一礼した。わざとらしいほどに慇懃な態度を取るアラクネの名は、イドラ。サキュバスたちが上質な餌を求めて集う人身売買組織、『花蜜のオークション』の主催にして司会者であった。

女の姿をして、男女関係なく人間や亜人との性行為に耽溺する魔物、サキュバス。『花蜜のオークション』は、そんなサキュバスだけを対象として美しく珍しい性奴隷を出品する魔族の闇市だった。淫らな欲を豊満な胸に宿したサキュバスたちが集う薄暗い会場で、イドラはわざとらしく両手を広げる。

「ご存知の通り、このオークションはもともと優れた『商品』をこそ最初にご紹介させていただいております」

通常の人間のオークションであれば、優れた品物ほど後に回されるものである。しかしイドラのオークションにおいては、目玉商品ほど最初に売られる理由があった。それを踏まえても常になく得意げなイドラの態度に、欲にまみれた期待を寄せる会場のサキュバスたち。せっかちな者などは、既にもじもじと落ち着きなく股を擦り合わせていた。

「なんと本日はハイエルフ——それも、一度も繁殖したことのない『若い』娘を皆様にお届けいたします」

ざわ、と会場がどよめいた。エルフは美しく老いが遅く、おまけに吸精できる魔力が美味かつ豊富なためサキュバスにも人気な種族である。しかし彼らの多くは深い森に隠れ住んでいる上に集団での戦闘力が高く、人族はともかく魔族の間でも出回りにくい種族であった。

上位種である不老のハイエルフともなればなおさらである。ハイエルフの住処である、神域とも言えるような清浄な森は並大抵の魔族であれば近づくだけで浄化されてしまう。身体能力も魔力もエルフの比ではなく、神域に引きこもっていてそもそも俗世に現れることすらない。そんなハイエルフ、しかも神域で厳重に保護されているはずの『子ども』を捕まえてきたのたまうイドラに、驚きと疑いの目が向けられるのは当然であった。

「ええ、ええ、皆様驚かれたことかと思えます。疑いもごもつともありませんよう」

モノクルの奥に計算高い眼差しを隠し、イドラはパンパンと手を打ち鳴らす。アラクネの配下であるジャイアントスパイダーが糸を操って幕を開けると、会場のどよめきは興奮と感嘆の声へと変わった。

その少女はアラクネの糸で作られた蜘蛛の巣に、一糸まとわぬ姿で磔のように縛られていた。

白金を薄く細く縊り集めたかのごとき絹糸の髪、瑞々しく透き通るような白い肌。葉で眠らせているのか、その瞳は瞼の奥に閉ざされているが——人の作る人形など足元にも及ばない可憐で美しい顔立ちと、まさに神の造物とでも言うべき美しい肢体。ハイエルフの中でも幼いら

しくまだその体は未成熟で、この場に似つかわしくないほど安穩とした寝顔はあどけない。けれど無垢で清らかなものほど汚す興奮を覚えるサキュバスたちには、未成熟なハイエルフの少女はひどく欲望をそえられるモノであつた。少女の内から感じられる魔力は良質かつ豊潤で、彼女が紛い物ではなく本物のハイエルフだとその魔力が知らしめる。あるサキュバスはごくりと唾を飲み込み、またあるサキュバスは頬に手を当て、ほうとため息を吐く。会場に数十数百という淫欲の化身たち、その全てが、いとけない少女に欲情の視線を向けていた。

「——この魔力をご覧いただければ、一目瞭然かと思ひます」

どうやってハイエルフの、それも『大人』たちに厳しく管理されている『子ども』を捕らえたのか。そんなことはこの場の誰も気にしないし、イドラも自慢げに語ったりはしない。重要なのは、縛られ眠る少女が『商品』であり、目の前にいるサキュバスたちは『買い手』であることだった。

「愛らしい眠り姫の名はリリアンヌ、瞳の色は木漏れ日のように暖かく、ペリドットのごとく澄んだ碧眼でございます。世間知らずで素直、やや臆病で加虐の欲を煽りたいへん可憐な少女です。未通かつ未成熟な『子ども』ですから、お客様の好みに合わせて調教していただけます」

サキュバスの誰かが、舌なめずりをしたようだった。エルフやハイエルフにおける『大人』や『子ども』の区別は、具体的な年齢によって分けられるものではない。無論ある程度の身体の成熟は前提となるが——エルフであれば数十年に一度、ハイエルフであれば数百年に一度の

『繁殖』を行つたことがあるかどうかで、彼らは成人を区別するのである。そもそも個体数の少ないハイエルフであるから、エルフ以上に見かけることがない稀少な種族の処女など、長命種であるサキユバスでさえ数世代に一度も見られないほど珍しいモノであつた。

サキユバスたちには、純潔か否かを識別する嗅覚がある。リリアンヌという少女の無垢な秘裂に吸着させられている貞操帯の奥が未だ誰も穢したことのない新雪であることを、この場の誰もが嗅ぎ取つていた。

「さて——これ以上皆様を焦らしては私が犯されてしまいそうですね。『手付金』のお時間でございます」

むわりと会場内に充満する淫気に、イドラは大仰に肩を竦めた。『手付金』とはこのオークション特有のシステムであつた。展示される奴隷に、支払つた額に応じて『お触り』ができるのである。いわばお試しだ。『手付金』による味見が済んだ後、本格的な競売が行われ落札へと至る。見境がないが好みのうるさい淫魔たちが『手付金』に参加するのは、普段ならどんなに多くとも会場の半数といったところである。

しかし、会場を見渡したイドラは魔族らしくいやらしい笑みを浮かべた。見渡す限りの、赤い光。会場にいるほぼ全てのサキユバスが、『手付金』への参加の意志を示していた。

「ふふ、可愛い子ね」

「眠っているのにこんなにお股をもじもじさせて、いやらしい子……」

入れ替わり立ち替わり、眠るリリアンヌは無垢な体を悪戯されていた。人形のように好き勝手触られ、弄り回され、もみくちゃにされる。妖艶な女性の姿をした淫魔たちの、しなやかで豊満な肉体がしつとりと重ねられた。たおやかな手が伸びてきて、するすると臍の周りを撫で回される。はたまた首筋に形のいい鼻先を埋められ、悩ましい吐息を吹きかけられる。

性感を強制的に引き出す淫魔の指先が、舌が、欲望のままに無垢な柔肌を這い回る。薬と魔術で意識を封じられていても淫魔に感じさせられてしまう体の生理的な反応を見て、リリアンヌを弄ぶ美しい女の姿をした淫魔たちは恍惚とした嗜虐的な表情を浮かべていた。

「おっぱいはまだお子様なのね」

「買ったあとに、胸を大きく改造してあげるのが楽しみだわ」

「薬や魔法で無理やり大きくするより、自然に育てるのがいいんじゃない」

既に我が物顔で好き勝手言いながら、幾人もの淫魔の手がリリアンヌの発育途上の胸を弄ぶ。ふにふにと柔らかく揉みしだく者もいれば、すりすり指の背で撫ぜる者もいる。少し強引な手つきで驚づかんで揉み込むように指を食い込ませる者もいれば、淡い桜色の尖りを執拗に捏ねくり回す者もいた。

最初こそお行儀よくイドラの案内に従って順番を守っていた淫魔だが、元来我慢強さとは無縁の我儘で気まぐれな種族である。次第に順番のことなど忘れ、無秩序にリリアンヌに群がり始めた。

アラクネの特殊な糸によつて、リリアンヌの体は蜘蛛の巣に絡め取られている。両手首を頭の上に纏めて縛られ、脚は閉じた状態で足首で纏められて。まだ膨らみきつていない胸には、それぞれにサキュバスが吸い付いてる。乳房を撫で回したり、乳首を摘み上げたり、蠱惑的な唇で啞えこんで舐めしゃぶったり、吸い上げたりと幼い乳房は淫魔たちのおもちゃのようにされていた。

否、おもちゃにされているのは胸だけでなく全身である。露になった腋を舐められ、二の腕に吸い付かれ。閉じられた股には何人ものサキュバスが手を差し込み、いやらしい手つきで柔い内腿を撫で回している。時折鼠径部に指先を滑らせたりするいたずらな手は、『お触り』では外されない貞操帯をコツコツとつついて秘部に振動を与えたりもしていた。

脇腹や下腹部も淫魔が見逃すわけがなく、するりと撫でられたり、ちゅつと口付けられたりと余すところなく嬲られる。顎を掴んで可憐な顔を舐め回すように眺められ、キスは禁止行為であるために耳を弄り回したり髪を撫でられたりする。何人もの淫魔に囲まれて全身の至るところを愛撫されるリリアンヌは、眠りの中にあつても息を荒げていて。かすかに漏れる甘い吐息も、紅潮した頬や血色のよくなった体も、加虐的な淫魔たちにその先を望ませるには十分すぎた。

中にはリリアンヌの太腿にすりすりとお尻を押し付ける者もいて、やんわりとイドラに『お触り』のルールに抵触していると離される。性的興奮を高めさせられたリリアンヌの体は匂い立

つような甘い魔力をこぼれさせていて、淫魔たちの『食欲』はかつてないほどに高まっていた。

「さあ、それでは入札と参りましょう」

思う存分に淫魔たちがリリアンヌへの『お触り』を堪能した頃、囁くように告げたのは、この淫靡な空気の満ちる中にあっても平然とした顔のイドラだ。洗淨魔法でリリアンヌの体とステージを清め、すました顔で会場に笑顔を向ける。しかし彼女も酩酊するような会場の空気に少しはあてられているらしく、そのずる賢い瞳はぎらぎらと光っている。あるいは、この無垢で蠱惑的なハイエルフの少女がもたらすであろうかつてない富にイドラは昂っているのかもしれない。

「五百」

「千二百」

「七千」

高値のエルフでさえ、七十が精々である。桁は当然省かれていた。いつものオークションであればせこましい競り合いが行われるところだが、今回ばかりは桁外れに値段がつり上がっていた。

自身が淫魔の手や舌などでなぶり回され、売買されていることなど素知らぬ顔でリリアンヌはこんこんと眠り続けている。それはこの後に控える『ご主人様との契約』によって、現実という名の悪夢と対面することが定められているからであった。

「五百万」

熱狂している会場が、シーンと静まり返った。誰からともなく、艶美な声の主に視線が集まる。最も高い席に陣取った淫魔が、艶めかしく脚を組み替えた。

そのサキユバスの装いは娼婦のごとく淫らで、王妃のごとく豪奢。浮かべる笑みは聖母のごとく慈しみに溢れていて、優しげな印象の垂れ目はしかし、傲慢で酷薄な眼差しを宿していた。

赤い瞳は静まり返った淫魔たちを女王のごとく見下しており、毛先に癖のある薄紫の髪をゆつくりと腕でかき上げた彼女は、この会場のどの淫魔よりも官能的で美しく、艶やかで冷たい色気に溢れていた。

「端金で争う気はないの、私は」

毒々しいほどに艶かしい唇が、耳から脳髓を溶かすほど蠱惑に溢れた声で語りかけた。特段大きな声でもないのに、支配者のごとく全ての者を縛り付けていく。

「……ユリアージュ様が、現在の最高価格を提示なさいました」

「現在ではないわ」

びしやりと鞭打つような声は、しかし甘美である。その言葉の意味するところは、誰がどんなに身を削るような額を提示しても、誰も手を出せないような、さらにその上を示すということだった。気だるげながら鋭い視線を向けられ、しかしイドラはやはり図太い神経を有していた。

「では、リリアンヌ嬢はどうあってもユリアージュ様が落札されるということで。会場の皆様、異議はございませんか？」

形式的な最終確認に、示し合わせたような沈黙が返った。ユリアージュと呼ばれた淫魔は、それが当然だといふかのように何の反応も見せない。なぜなら彼女は実際、淫魔の女王と言っても差し支えないほどの存在であるからだだった。傍に控えていた桃色の髪の淫魔にユリアージュが目配せをすると、こくりと頷いたその淫魔はイドラの元へ降りてひそひそと耳打ちをする。わずかに目を見開いたイドラは、次の瞬間大きな笑みを浮かべて声を張り上げた。

「千万！ 千万にてリリアンヌ嬢はユリアージュ様に落札されました！」

統率されないはずの淫魔たちが、操られたように盛大な拍手をする。『底無し女王』ユリアージュ、彼女は人間どころか他の魔族も、あまつさえ同族である淫魔さえも犯し尽くした淫欲の女王だった。それによつて魔王にも劣らない魔力を得たユリアージュは、淫魔に対しても支配者然として振る舞う彼女たちの上位者だった。『お触り』に参加しなかった彼女だが、そんなものはユリアージュには必要ない。犯したければ犯せばいい。それだけが彼女の行動指針だった。

「姦通の儀はこちらでなさいますか？」

「——ええ、そうするわ」

嵐のような拍手が静まったのち、イドラが仰々しい仕草で問う。軽く頷いたユリアージュは、軽やかに立ち上がってリリアンヌのいるステージへと降りていった。その気になれば転移で脚を動かすことなく移動できるものをそうしないのは、コツコツと鳴り響くハイヒールの音を聞かせるためのように思えた。

磔のように縛られていたリリアンヌに向けてイドラがくいくいと指先を動かすと、頭の上で縛られている腕はそのままに脚の縛り方が変わる。体を折り畳むように、いわゆるまんぐり返しのような格好で、足首を顔の両脇に広げるようにリリアンヌは縛り直された。そしてその秘部を突き出して見せ付けるかのようなはしたない姿は、目の前に降り立ったユリアージュ、そして会場の全てのサキュバスの目に晒されている。

「貞操帯は、もう少しこのままでいいわ」

「かしこまりました」

鷹揚に腕を振ったユリアージュに、イドラは一礼して一步引く。口の端を吊り上げるように笑みを浮かべたユリアージュは、ばさりと何のてらいもなく豪奢で淫らなドレスを脱ぎ捨てる。ぴったりと体のラインに張り付くような際どいコスチュームだけになったユリアージュはリリアンヌの体にそっと自らの肌を重ねると、じれったいほど丁寧な愛撫を始めた。

指先で小さい唇を撫で、頬を優しく包み込む。エルフ特有の長い耳に口を寄せ、ねっとりとした舐め回しては啜えこんでしゃぶる。両手でやんわりと包み込むように乳房を揉みしだき、乳輪をすりすりとした撫でては決定的な刺激を焦らし。『お触り』から解放されて一度は静まったリリアヌの体が、再び情欲に火照り始める。「ん、」と先程よりもハッキリした声はその細い喉から溢れて、ユリアージュは艶然と笑った。

「気持ちいいのかしら？ リリアヌちゃん……」

未だ眠りに閉じ込められているリリアヌからの応えはないが、まるで返事をするように「はう……」と吐息がこぼれる。

「まだ子どもなのに敏感で……いやらしくて素敵よ、リリ……」

笑みを深くしたユリアージュは、勝手に愛称をつけると素直な反応のご褒美とばかりに両方の乳首を摘み上げた。びくんと細い肢体が波打つように跳ね、柔らかい白金の髪が乱れる。かり、かり、ともどかしいほどゆつくりと爪を引っかけ、かと思えばくにくにと果実を弄ぶようにこね回す。つんつんと触れるか触れないかの加減でつついてみたり、ぐに、と陥没させるように押し込んだり、こすこすと指の腹で擦るように撫でられたり。リリアヌの慎ましく愛らしい乳首は、淫魔の女王の指先にすっかりおもちやにされていた。

「あ、あ……ん、」

「ふふ、もう脚をもじもじさせて……素直で可愛いリリちゃん」

淫魔のおもちゃにされて発情を強いられた幼い体が下半身への刺激を求めるように腰をくねらせても、それをわかっていてユリアージュは乳首だけを弄り続ける。まるで愛しい妹に対するように耳元で囁きかけ、甘やかすように耳や頬にキスを落とし。それでも残酷なほど、控えめだった尖りがぶつくりとそり立つてもなお、くりくりと指先だけでおもちゃにしている。

淫欲の支配者とも言えるユリアージュがいとけなく清らかなリリアンヌの体を快楽に染め上げていく光景に、サキュバスたちは陶然と見入っていた。はあはあと息を荒らげ、股に手を突っ込む者や近くの淫魔と肌を重ね合わせる者もいる。先程と違ってイドラは何も言わず、出来のいいマネキンのように変わらない笑顔を浮かべて会場のオブジェのようにそれらの光景を見守っていた。

「おねむのリリアンヌちゃん……知ってるかしら？ 淫魔の体液はね、とおつても強い媚薬なのよ」

先ほど淫魔たちに捌られたリリアンヌの体が、処女のハイエルフでもあるにも関わらず発情しているのはそれが原因だった。毒や薬物に強い耐性を持つハイエルフだが、ああも大勢の淫魔の唾液や汗をすり込まれては淫毒の影響を受けてしまう。否、耐性のあるハイエルフだからこそこの程度で済んでいるのだろう。ただの人間や下位互換のエルフであれば、とつくに快楽に狂っていてもおかしくなかった。

「媚薬の強さは魔力の強さに比例するから、私のはすっごく気持ちいいのよ……」
言うや否や、ユリアージュはリリアンヌのぶくりと勃起した乳首にしゃぶりついた。

「はぁんッ……!」

「ん、はむ、リリちゃんの乳首、とってもおいしいわ……」

性器への刺激によって、淫魔はそこから放出される魔力を食らうことができる。尖り立った乳首にれろれろと舌を這わせるだけで、極上の魔力が舌を通して染み渡っていく。細い腰に抱き着いてビクビクと痙攣する幼い体を抑え込むと、容赦なく媚薬唾液を塗り込めるように小さな乳首を舐め回した。控えめな大きさのそれはユリアージュの長く肉厚な舌にいいように舐め弾かれ、ぴちぴちと舌先で遊ばれる。

薬と魔術がなければ過ぎた快感でとくに起きているであろうリリアンヌの泣き声じみた嬌声が嗜虐心を刺激して心地よく、ユリアージュは未通の少女の乳首を我が物顔で舐めしゃぶった。舐めれば舐めるほど感度の上がっていく乳首は、魔力の流れが見える者にはまるで母乳でも垂れ流しているかのように甘い魔力を漏らす。その魔力が霧散してしまわないように長い舌でべろりと乳房ごと掬い上げ、労わるようにちゅつと乳首にキスを落とす。

「起きたらおかしくなっちゃうかしら……」

心配そうな声音とは裏腹に、紅玉のような目は残酷な欲に濡れていた。もう片方の乳首も仕込むのだと言わんばかりに、口内に唾液を溜めてからかぶつと咥え込む。ぬるぬると溶けそうなほど温かい口内に包まれた乳首を、とろろと唾液が侵していく。

しばらくの間動かずにゆっくりと媚薬を染み渡らせたユリアージュは、突然じゅるるっ!と激しくそれを吸い上げ始めた。

「ふああんっ!？」

じゅる、じゅるるる、ぴちゃっ、じゅるり、と鳴り響く淫猥な水音を掻き消すほどの喘ぎ声が無垢な唇から溢れ出す。濡れた唇でしごくように乳首を挟み込んだ淫魔女王は、再び乳首にとろりと唾液を伝わせる。そしてまた乳首が溶けそうなほどに吸い上げて、労わるように唇で撫でて。何度も繰り返されたそれが終わる頃にはリリアンヌの体はぐったりと脱力し、喘ぐことすらできずに荒い息を繰り返していた。

「下ごしらえは半分、といったところかしら」

リリアンヌに意識があれば、まだ半分なのかと青ざめていただろう。ようやくリリアンヌの乳首を解放したユリアージュは、濡れた口元を軽く拭って妖しく笑う。

会場内の淫魔たちはすっかり我慢が利かず、思い思いに淫欲にふけっていた。くちゅくちゅと膣内を自身の指でかき回す者、淫魔であれば自由に生やせる陰茎をしごいている者、自らの尻尾をアナルに入れて抜き差ししている者、無法地帯と化していた。

元より自身の欲求に忠実な淫魔ではあるが、ユリアージュとリリアンヌの濃密な前戯にあてられてオークション会場が肉欲の宴と化している。開催者であるイドラが快く見守っているのは、即決価格の何十倍も対価を積んだユリアージュへのサービスであり、淫魔たちの購買意欲を高めるパフォーマンスでもあった。

「みんな私たちのセックスにみんな夢中よ、リリちゃん……ふふ、もつと見せてあげましょね」

透き通るような白い肌には珠のような汗が浮かび、肉の薄い肢体を艶めかしく伝い落ちていく。貞操帯に覆われた秘部が『観客』たちに見えるように体をずらしたユリアージュは、するりと蛇のような動きで臀部から生えた黒い尻尾を持ち上げた。

サキュバスたちの視線を集めるリリアンヌの貞操帯おまんこを、先が膨らんで花の蕾のように閉じたその尻尾で掠めるように撫でる。貞操帯の内側からは、既に溢れるほどの愛液が尻まですべり落ちていた。

「おまんこはもうトロトロね……でもハイエルフは慎ましい種族だから、もつとじっくり仕込んであげる」

その種の特別性がゆえに、性行為は数百年に一度の繁殖でしか行わないハイエルフ。彼らにとって性交は快楽を得るためのものではなく、子を成すための神聖な行為である。

清めの泉の中で男女が向かい合い、男は勃起と射精を促す薬湯を、女は閉じた秘所を緩め痛みを軽減する薬湯を飲んで長老の立ち会いの元わずかな時間で交合を果たす。そもそもが種として性に未熟であるとも言えるのだ。

リリアンヌが囚われることなく生きていれば、知らずに済んだはずの欲に塗れた行為。それをまるで優しい気遣いのように言い放ったユリアージュは、鎌首をもたげるように尻尾の先を

貞操帯に向けた。吸着タイプであるが故に単なる装飾として開けられている鍵穴の上で、ぐぱつと花開くように尻尾の先端が四方に広がる。雄しべのようにその中心から伸びた細めの触手が、どろりと粘液を伝わせた。

「私の体内で精製した媚液よお、リリアンヌちゃん……飲みきれないほどたっぷり注いであげる」

恍惚とした口調で、ユリアージュは尻尾から体液媚薬を鍵穴目がけてとろりと注いでいく。薄ピンクの透明な液体が、小さな鍵穴から貞操帯の内側——穢れを知らなかった膣口へと注がれていく。ユリアージュが乳首に塗り込んだ唾液だけでも過剰なほどに性感を高められれているというのに、精製した媚液などを直接膣内に注がれては目覚めたとしてもまともに意識を保つこともできないだろう。

清らかな少女に残虐な仕打ちをしているというのに、ユリアージュの優しげな垂れ目はとぶとぶと注がれていく媚液を眺めて嬉しそうに細められる。とろりと粘性の高い媚液が浸潤し、がんぜないリリアンヌの寝顔が熱に艶されているように歪んでいく。花弁のような唇は虚ろに開かれ、体内に籠った熱を少しでも逃がすかのように浅い呼吸を繰り返していた。

「——あら、やっぱりこぼしちゃうわね」

とぶりと鍵穴から溢れ出た媚液が貞操帯をてらてらと光らせながら流れ落ちていくのを見て、ユリアージュはまるで困っているように頬に白魚のような指を当てた。内側から愛液を溢

れさせてはいても、与えられた快楽に柔く蕩けていても、未通のリリアンヌの秘裂はきゅつと狭く閉じているのだから媚薬をそう多く流し込めるはずもないのに、である。

当然わかつていてとぼけたように首を傾げたユリアージュは、にこりと貴婦人のように上品な笑みを浮かべるとリリアンヌの股を覗き込むように屈んだ。緩い癖のある薄紫の髪が、さらに落ちて白い太腿を撫ぜる。

「リリちゃん、おまんこ撫で撫でてあげましょうね」

くちゆりと、粘着質な水音が鳴った。吸着スライムで貼り付いているだけの貞操帯に軽く指を添えて、くちゆくちゅと上下に滑らせて動かす。自慰にふけるサキュバスたちに見せ付けるように、聞かせるように、媚液たつぷりの水音を響かせながら貞操帯ごとリリアンヌの秘部を撫でさすった。

「……ああん、はあッ、あつ、ふ、」

「可愛い声ね、リリアンヌ」

腑抜けたような声を上げるリリアンヌに蕩けるような笑みを向けて、ユリアージュは撫で擦る速さを上げていく。ぴったりと陰唇に吸い付く吸着スライムの間に生温かい媚液が浸透し、まるで蕩ける媚肉を押し当て貝合わせされるような快感がリリアンヌに甘い声を上げさせる。クリトリスもすつぽりと吸着されながらにゆちにゆちと包み込まれるように擦られ、甘く痺れるような快楽が全身に溶け出していく。

蕩けるような魔力もこぼれ出してきていたが、ユリアージュはその吸収に頓着することなくぬちぬちゅと手を動かして『撫で撫で』を続けていた。

「いい子ね、リリ。おまんこ撫でられて腰をふりふりして、欲しがりで可愛いわ……」

「あう、ああ、はうん……！」

「もつとよしよしされたいのね？ 私のリリ……」

もはやぐちゅぐちゅとおどましいほどの音を立てながら、姉のような優しさでユリアージュは白い喉を反らすリリアンヌの丸い頭を空いている手で撫でる。その手で示す慈しみと、もう片方の手で強いる淫虐の落差は恐ろしいほどののに、聖母のような顔をしてリリアンヌの額に口付けたユリアージュはどこまでも美しかった。汗ばんで貼り付いたリリアンヌの前髪を優しく整え、リリアンヌの顎を掴んで語りかける。

「もうちょっと頑張ったら、あとでいっぱいキスをしてあげるわ」

まるでそれがリリアンヌの望みであるかのように一方的に語りかけ、貞操帯を上下させる手は激しくなり止まらない。眠っているせいか未通であるせいかあれほどの快楽を与えられても胸ではイけなかったリリアンヌの体は、媚液ローション吸着摩擦に耐えられずに何度も達してビクンビクンと跳ね上がっていた。自らのあずかり知らぬところで初めての絶頂を強制され続ける少女に、同情する者など誰もいない。

会場の中はもはや淫魔の愛液と精液の匂いがむせぶほどに満ちていて、人間が一步足を踏み入れたその場で絶頂しそうなほどだった。

「おまんこくちゅくちゅ、とっても気持ちいいわね、リリちゃん」

「はう……ッ!!」

「上手にイけてえらいわ、ご褒美にもつと撫で撫でしてあげる」

リリアンヌが執拗な『撫で撫で』から解放されたのは、何度絶頂を数えた後だろうか。とうにイドラによって封印を解かれていた貞操帯は、追加でたっぷり注がれた媚液と溢れ出した愛液でとうとう滑り落ち、べちゃりとステージの床に落ちる。一度落ちたそれを拾う気などユリアージュには微塵もないようで、貞操帯の下から現れた宝物を目にして恍惚のため息を吐いた。

「ああ、なんておいしそうな淫乱処女おまんこ……」

ところどころに蕩けたソコは、みずみずしくも熟れた果実のよう。愛液と媚液が筋に沿ってとぷりと甘い果汁を滴らせ、ぷにりとした弾力のあるおまんこ肉が閉ざしている割れ目は極上の柔らかさに蕩けている。

膣口は物欲しげにヒクヒクと震えているが表面を撫でほぐされただけで狭く、匂い立つほどの魔力と愛液を溢れさせ、蕩けながらもしっかりと締まった穴は淫魔の目にはもはや自身に捧げられた最高の供物にしか見えなかった。

「さあ……おはようの時間よ、リリアンヌちゃん。今からあなたは、私の可愛い可愛い性奴隷になるの」

姦通の儀。『花蜜オークション』で競り落とされた奴隷は、主人に犯されることで契約印が刻まれる。どんなに達しても解けなかった眠りの魔術はその反動で解除され、奴隷は目覚めた瞬間主人の一物と印を最奥まで刻まれているのだ。姦通の目覚め、性奴隷のその絶望こそ、花蜜オークションで最も淫魔たちが昂る瞬間だった。

そんなことを知る由もない、眠らされたままのリリアンヌの拘束された脚をユリアージュがしっかりと掴む。このままではユリアージュの言葉通り淫魔の女王に未使用まんこを貫かれ性奴隷としての一生に墮とされてしまうのに、リリアンヌは目覚められない。クリトリスをグロテスクなまでに長太い陰茎に肥大化させ、先走りを滴らせながらリリアンヌの下腹部に擦り付けるユリアージュ。ふにふにすべすべとした薄い腹を、脈打つ血管が浮き出る凶悪な肉棒が押し撫でる。先ほどまで聖母のような笑みを浮かべていたその顔は、魔族である淫魔に相応しい悪辣な喜悦に浮かされていた。

狭く小さな膣口にカウパーをだらだらと垂らす亀頭を擦り付け、くちゅくちゅと媚液混じりの愛液と先走りを混ぜ合わせるように先端を濡らす。溶けるように吸い付くぬかるみが、女王の施しを待ち望んでいるかのようにだった。

「犯されて目覚めるあなたの瞳、どんなに可愛らしいの、かしら……ッ！」